

大学新入生の学校適応に関する心理学的検討： 質問紙調査によって抽出された9事例に関する質的分析

A Qualitative Analysis of Nine Cases on the Adaptation of College Freshmen

藤重 育子* 本田 周二* 清水 寛之**

Ikuko Fujishige, Shuji Honda, Hiroyuki Shimizu

(論文要旨)

本研究は、神戸学院大学人文学部人間心理学科1年次生(154名)を対象に、高校時代と大学入学後の現在での適応について、学習面・生活面・対人関係面に関連したいくつかの質問項目とレポート課題の分析を通して検討した。生活満足度・授業理解度・授業快適度・学校好意度の4つの指標に関するクロス表から不適応の疑いのある学生9名を抽出し、本人が記述した大学に関する課題レポートの内容について質的分析を行った。現在不適応を起こしている可能性の高い学生はもちろん、過去に不適応であったが大学入学後急激に適応していると過剰に自覚している学生にも着目した。学生個人を特定したうえで、個人の特徴や問題の背景となる周辺状況を検討し、個々の学生への教育支援を充実させ、より快適な大学生活環境を提供するための方策を考察した。最後に、今後の一般的な教育支援のあり方について考察した。

(Abstract)

Adaptation of students in high school and their conditions in college was investigated in freshmen students at the Department of Human Psychology of Kobe Gakuin University (N=154). Responses to a questionnaire relating to three aspects of college life were analyzed; learning, life style, and interpersonal relationship. We also examined the contents of an open-ended description about campus life, written by students as an assignment in a class on Introductory Practice of Psychology. As a result, we obtained the contingency tables on adaptation of 4 measures (satisfaction of life, comprehension of lectures, pleasantness of classes, and likeness of schools) in high school which were retrospectively rated by the participants, and in the current states. Based on the data, we extracted and focused on 9 students, including those with problems of maladaptation, as well as those who showed excessive feelings of abrupt adaptation compared to maladaptation in high school. We identified the individual students, and examined their characteristics and the background to their problems. We have discussed several supporting methods and strategies to facilitate a more pleasant learning environment in college. Also, the nature of support that is needed and how to provide it in institutions of further education were discussed.

キーワード：学校適応, 大学新入生, 質的分析, 質問紙調査, 教育支援

Key Words : school adaptation, college freshmen, qualitative analysis, questionnaire, educational support

*人文学部 実習助手

**人文学部 教授

1. 問題

本研究では、大学新生の学校適応をサポートするために、学校適応に困難を抱えている可能性のある学生の抽出および、学生に対する支援のあり方について検討することを試みる。大学新生の多くは、高校時代に大学進学のための勉強に励み、入学試験に合格して、ようやく大学という環境のもとで新しい学生生活を送り始める。その際、高校の頃とは様子が異なり、多少のとまどいや違和感をもつことは少なくない。大学での学修が自分の思っていたものとは違っていた、学生生活そのものが楽しくない、などの様々な理由で大学に対して幻滅し、入学後のまもない時期に退学や休学を考える者もいる。大学新生が大学生活に適応し、充実した学生生活をサポートすることは教職員の責務の一つである。大学新生の学校適応に関して、これまでに様々な研究がおこなわれてきた。

山田（2006）は大学新生における適応感について検討している。その中で、高校までの発達課題が達成されないまま大学に移行し、適応に大きな困難を抱える学生が増えてきている実情に着目した。そして、これまで中学生・高校生を中心に引きあげられてきた不登校の概念が大学生にまで拡張されると指摘している。大学新生は、大学入学直後に始まる、授業科目の履修案内や履修計画・履修登録、授業への出席、レポート課題の提出など、学習面での変化に適応しなければならない。また、通学や暮らしに関連した生活面においても、これまでの高校時代とは180度変化した環境に適応することが求められる。つまり、新生にとって、多くのストレスに対処しながら次々に進んでいくスケジュールをこなしていくことは困難な課題であり、入学後のまもない時期が適応への重要な移行期であると考えられる。

一方、藤井（1998）は、「スチューデントアパシー」、「就職恐怖・卒業恐怖」、「触れ合い恐怖」等の多様な病理現象の背後には、大学生の未熟さと共に、常に「不安」が存在していることを指摘している。これまでの理論的研究や実態調査の結果を概観し、多くの場合、本来入学したいと思っていた大学とは異なる大学に入学した、いわゆる不本意な入学者のうち、少なくともその2割以上の学生が「大学不適応」を起こしていると述べている。

しかも、そういった不本意な気持ち（不本意感）は、入学後もただちには解消されない。この点について、小林（2000）は様々な要因を指摘している。「授業が面白くない（興味を持たない、難しい）」、「履修登録を失敗した」、「単位が取れそうにない」、「教員に違和感がある」、「自分の適性に疑問が出てきた」、などが不本意感を生じさせる要因としてあげられている。小林（2000）によると、大学への不本意入学は、①志望する大学に不合格で、第二志望以下の大学に合格し入学する「第一志望不合格型」、②志望する大学が別にあったが、合格の可能性を優先した「合格優先型」、③専門性を活かした就職のことを視野に入れて入学した「就職優先型」、④両親の経済的事情、大学に対する家庭の考え方などによる「家庭の事情型」、⑤ある程度有名な大学だから、どの学部でもいいというような受験で合格した「学歴目的型」、の5つの型に分類される。また、志望の大学・学部に入ったものの入学後に不本意感が生じる場合もある。授業に対しては「面白くない・内容が難しい」、「単位が思うように取れない」、「ゼミの先生に不満がある」、「学部・学科に不満がある」、「やりたいことができないとわかった」などの要因（または理由）が考えられる。こ

のように、不本意入学・不本意進学から進路変更に繋がることも少なくないと考えられる。

鳴澤（1998）は、特定の大学の調査結果に基づいて、在籍学生の10%はかなり深刻な悩みや問題を抱えていることを明らかにしている。そして、一定程度の悩みは人の成長の原動力になるが、重すぎたり多すぎたりすると、成長の足を引っ張り身動きをとれなくすることを指摘している。おそらく、症状や問題行動は、いわば本人から周囲の人への警告とSOSの信号であると考えられる。自分で長い歳月をかけて苦しみ努力して克服できないこともないが、多くは外からの援助が必要である。その手段として、教職員による学生相談やキャンパス内に設けられた学生相談室の利用があげられる。杉原（2000）によると、学生相談では、修学・進路の問題について助言がほしいとき、自己の心身や対人関係の悩みがあるとき、他者とのトラブルについて解決を助けてもらいたいとき、自己の新しい面を発見したいとき、居場所がほしいとき、などに相談が持ちかけられることが多いという。このように、大学教育とは講義室や演習室における正課の活動だけではなく、課外活動を含む学生生活全体を視野に入れて、学生がより豊かで充実した生活を営めるよう導くことが大切である。

吉岡（2010）は、友人関係に関する問題が実際の学生相談の中で多くの割合を占め、友人関係は個人の悩みの原因であると同時に、悩みに直面したときのサポート源でもあることを指摘している。大学生の場合は、履修する授業科目が学生によって異なり、サークルやアルバイトなどの活動時間帯によって人間関係も流動的になる。また、一人暮らしであるか、実家から通うかといった居住形態の違いは、友人数や友人と付き合う時間（休日）、生活費、交際費といった友人関係の実態に影響する。その一方で、それらは友人関係のあり方そのものとは関係しないことを明らかにしている。つまり、友人をどのように捉えて、どのような関係をもつかは、個人の認識によって決まるとされている。康（2000）は、こうした大学生の対人関係に関連して、入学後1、2か月を過ぎる頃に学生の輪に自然に溶け込めない者は、最初の段階でうまく対人関係がつかれず、学内で自分の居場所を見つけることも難しいと述べている。講義中は机に向かっているため不安を感じることはないが、休憩時間になると一緒に話をする相手がいないので、どう時間を過ごせばいいかわからない、という学生もいるようである。そのような学生は、そのうちにまわりの学生たちが自分のことを興味本位に観察しているのではないかというような気持ちを持つことも多い。さらに、それが高じて、他者からの批判に満ちた視線にいつもさらされているような気がして、ますます対人関係から引きこもってしまうといった、悪循環に陥るのではないかと懸念される。

広沢（2007）は、大学に入学して半年後に、自分が学習面で適応していると思っている学生とそうでないと思っている学生とで、どのような違いがあるかを検討している。その結果、学習面で適応している学生はそうでない学生に比べ成績が良く、実際に学部・学科に適応しており、大学生活における授業へのウェイトのかけ方も高いことが示された。また、学習面で適応している学生は、学習面のみならず対人関係においても自信を持っており、この傾向は高校時代から受け継がれていることを明らかにした。このことから、新入生がその大学に適応していく過程において、対人関係面と学習面の2つの側面が重要であ

り、高校での適応にも関係があると考えられる。

以上のように、先行研究を概観すると、大学新入生の適応に関しては、青年期における多種多様な問題とも深く関連している。この問題解決に取り組むことは、学生への教育支援に関する多くの研究努力と共に、教育実践的な価値をもつと考えられる。

2. 目的

本研究では、2011年4月に神戸学院大学人文学部人間心理学科（以下、本学科という）に入学したばかりの学生を対象に、学校適応に関する基礎的な調査を行い、何らかの問題の生じるおそれのある学生を抽出し、そうした学生への教育支援のあり方を検討する。大学新入生の学校適応に関する問題をできるだけ早い段階で把握し、その問題が深刻化しないように留意し、予防的な対応策を講じることは、教育心理学的な見地からもきわめて重要であると考えられる。

まず、本学科の教育カリキュラムについて簡単に説明する。授業内容に関して、1年次生の前期授業科目に、学科全体および各領域に対応した、「人間心理学入門実習」等5つの心理学入門実習の授業が組み込まれている。それらは基礎専門教育科目として位置づけられており、必修科目の授業ではないものの、本学科を卒業するにあたり、学修すべき授業科目として設定されている。これらの学修に加え、1人暮らしやアルバイトなど生活面においても高校時代の教育環境とは大きく異なり、多忙な日常生活を送り、ストレスの高い状況に身を置いている者が多い。そのような学生を支援するために、本学科では、19名の専任教員と4名の実習助手が学生対応にあたっており、その相談内容は、学修、友人関係、課外活動等多岐にわたっている。

前述のように、新入生が大学に適応していく過程の中で、学習面や対人関係面が重要であることが明らかになっている。そこで本学科の学生においても、学校適応の問題に関して学習面や対人関係面に着目し、詳しく検討する必要があるだろう。さらに、先行研究において、高校時代の学校適応の程度が大学に入学した後も受け継がれるという知見が得られていることから、学生ごとに、高校在学中と大学入学後の様子を対応させて、適応に関する何らかの問題を明らかにすることが重要であると考えた。

なお、学校適応に関する研究はこれまでに数多く報告されているが、どちらかといえば、「現在不適応である」または「以前に比べて不適応状態が深刻化している」という対象者を探る研究や、不適応の原因を探る研究、より良い支援のあり方を模索する研究などが中心であった。もちろん、そういった検討も必要であるが、本研究は、高校時代に不適応であったが、大学入学直後にうまく適応できていると自覚している学生にも着目し、検討することにした。これは、急激な適応は何らかの歪みや反動を伴うものであるかもしれず、一時的な適応または一過性の適応には多くの問題が潜んでいると考えられるためである。入学直後に適応していても、その数か月から翌年、あるいは卒業の時期までに不適応を起こさないともかぎらない。

そこで、本研究では、大学新入生に焦点をあて、高校在学中と大学入学後の現在における学習面・生活面・対人関係面などの質問を通して、大学への適応に関する問題を検討する。さらに、学生本人が記述した大学生活に関する課題レポートの内容分析を踏まえて、不適

応の疑いのある学生を個別的に抽出し、質的検討を行う。そうした学生個人を特定したうえで、個人の特徴や、問題の背景となる周辺状況を検討し、学生への教育支援を充実させ、より快適な大学生活環境を提供するための方策を考察する。

3. 方法

3-1. 調査対象者

神戸学院大学人文学部人間心理学科に1年次生として在籍する学生186名のうち、調査説明を行った上で調査協力同意書に署名した者のみを調査対象者とした。調査対象者は、154名（男性65名、女性89名）であり、平均年齢は18.6歳（標準偏差.84、範囲18 - 22歳）であった。

3-2. 調査実施手続きと調査内容

(1) 大学入学前後の大学に対するイメージの違いについての自由記述

2011年4月下旬、「人間心理学入門実習Ⅰ」の授業終了時において、「大学入学前後の大学に対するイメージの違い」というタイトルで800字程度のレポートを課し、1週間後に提出させた。なお、学籍番号と氏名の記入も求めた。

(2) 学校生活についての質問紙調査

2011年7月下旬、「人間心理学入門実習Ⅰ」の授業時間内において質問紙調査を行った。その場で回答させて回収した。質問項目（全25項目）については、表1に示す。

表1. 質問紙調査において用いた項目一覧

項目内容	回答方法
問1 年齢	「18歳」から「22歳」の5件法
問2 居住形態	「自宅」「一人暮らし」の2件法
問3 高校 アルバイトの有無	「はい」「いいえ」の2件法
問4 大学 アルバイトの有無	「はい」「いいえ」の2件法
問5 高校 部活動所属の有無	「はい」「いいえ」の2件法
問6 大学 部活動・サークル所属の有無	「はい」「いいえ」の2件法
問7 人間心理学科の好意度	「はい」「いいえ」の2件法
問8 第一志望受験の有無	「はい」「いいえ」の2件法
問9 受験時のアドバイス	「自分の意思」「親」「きょうだい」「学校の先生」「塾の先生」「先輩」「同級生」「その他」の8件法
問10 高校 仲の良い友達の有無	「いた」「いなかった」の2件法
問11 大学 仲の良い友達の有無	「いる」「いない」の2件法
問12 高校 学校生活満足度	「非常に満足していた」から「全く満足していなかった」の7件法
問13 大学 学校生活満足度	「非常に満足している」から「全く満足していない」の7件法
問14 高校 授業理解度	「非常に理解できていた」から「全く理解できていなかった」の7件法
問15 大学 授業理解度	「非常に理解できている」から「全く理解できていない」の7件法
問16 高校 授業快適度	「非常に楽しかった」から「全く楽しくなかった」の7件法
問17 大学 授業快適度	「非常に楽しい」から「全く楽しくない」の7件法
問18 高校 学校好意度	「非常に好きだった」から「全く好きでなかった」の7件法
問19 大学 学校好意度	「非常に好き」から「全く好きでない」の7件法
問20 高校 将来の目標	「はい」「いいえ」の2件法
問21 大学 将来の目標	「はい」「いいえ」の2件法
問22 将来のための現在の活動	「はい」「いいえ」の2件法
問23 将来のための周囲との会話	「非常によく話す」から「全く話さない」の7件法
問24 未来の明るさ	「非常に明るい」から「全く明るくない」の7件法
問25 目標の人の有無	「いる」「いない」の2件法

4. 結果と考察

4.1. 考え方のずれの大きい学生の抽出

本研究では、質問紙調査の中でも生活満足度（問 12・13）、授業理解度（問 14・15）、授業好意度（問 16・17）、学校好意度（問 18・19）をたずね、高校と大学でのそれぞれの学校に対する考え方のずれが大きい学生を抽出したのち、対象者の課題レポートに焦点をしぼり、検討した。

(1) 高校と大学における生活満足度

「全く満足していなかった（していない）」と「満足していなかった（していない）」を満足度低群、「あまり満足していなかった（していない）」と「どちらでもない」と「やや満足していた（している）」を満足度中群、「満足していた（している）」と「非常に満足していた（している）」を満足度高群として作成した、高校生活満足度と大学生生活満足度のクロス集計結果を表 2 に示す。生活満足度においては、網掛け部分である高校生活満足度・大学生生活満足度共に低群である 3 名、高校生活満足度は高群であったが大学生生活満足度が低群である 3 名に加え、高校生活満足度は低群であったが大学生生活満足度が高群である 7 名を抽出して検討する。

表 2. 高校生活満足度と大学生生活満足度のクロス表

		大学生生活満足度			合計
		低群	中群	高群	
生活 高校 満足 度	低群	3 (1.9)	12 (7.8)	7 (4.5)	22 (14.3)
	中群	6 (3.9)	23 (14.9)	19 (12.3)	48 (31.2)
	高群	3 (1.9)	33 (21.4)	48 (31.2)	84 (54.5)
合計		12 (7.8)	68 (44.2)	74 (48.1)	154 (100.0)

表内の数値は人数を表わす、カッコ内の数値はパーセントを表わす

(2) 高校と大学における授業理解度

「全く理解できていなかった（できていない）」と「理解できていなかった（できていない）」を授業理解度低群、「あまり理解できていなかった（できていない）」と「どちらでもない」と「やや理解できていた（できている）」を授業理解度中群、「理解できていた（できている）」と「非常に理解できていた（できている）」を授業理解度高群として作成した、高校授業理解度と大学授業理解度のクロス集計結果を表 3 に示す。授業理解度においては、網掛け部分である高校授業理解度・大学授業理解度共に低群である 1 名に加え、高校授業理解度は低群であったが大学授業理解度が高群である 1 名を抽出して検討する。

表 3. 高校授業理解度と大学授業理解度のクロス表

		大学授業理解度			合計
		低群	中群	高群	
授 業 高 校 理 解 度	低群	1 (0.6)	2 (1.3)	1 (0.6)	4 (2.6)
	中群	1 (0.6)	60 (39.0)	20 (13.0)	81 (52.6)
	高群	0 (0.0)	36 (23.4)	33 (21.4)	69 (44.8)
合計		2 (1.3)	98 (63.6)	54 (35.1)	154 (100.0)

表内の数値は人数を表わす、カッコ内の数値はパーセントを表わす

(3) 高校と大学における授業快適度

「全く楽しくなかった（しくない）」と「楽しくなかった（しくない）」を授業快適度低群、「あまり楽しくなかった（しくない）」と「どちらでもない」と「やや楽しかった（しい）」を授業快適度中群、「楽しかった（しい）」と「非常に楽しかった（しい）」を授業快適度高

群として作成した、高校授業快適度と大学授業快適度のクロス集計結果を表4に示す。授業快適度においては、網掛け部分である高校授業快適度・大学授業快適度共に低群である5名、高校授業快適度は高群であったが大学授業快適度が低群である2名に加え、高校授業快適度は低群であったが大学授業快適度が高群である7名を抽出し検討する。

表4. 高校授業快適度と大学授業快適度のクロス表

		大学授業快適度			合計
		低群	中群	高群	
授業快 高校 適度	低群	5 (3.2)	10 (6.5)	7 (4.5)	22 (14.3)
	中群	3 (1.9)	48 (31.2)	26 (16.9)	77 (50)
	高群	2 (1.3)	20 (13)	33 (21.4)	55 (35.7)
合計		10 (6.5)	78 (50.6)	66 (42.9)	154 (100.0)

表内の数値は人数を表わす、カッコ内の数値はパーセントを表わす

(4) 高校と大学における学校好意度

「全く好きでなかった(でない)」と「好きでなかった(でない)」を好意度低群、「どちらかといえば好きでなかった(でない)」と「どちらでもない」と「どちらかといえば好きだった(好き)」を好意度中群、「好きだった(好き)」と「非常に好きだった(好き)」を好意度高群として作成した、高校好意度と大学好意度のクロス集計結果を表5に示す。好意度においては、網掛け部分である高校好意度・大学好意度共に低群である2名、高校好意度は高群であったが大学好意度が低群である3名に加え、高校好意度は低群であったが大学好意度が高群である5名を抽出し検討する。

表5. 高校好意度と大学好意度のクロス表

		大学好意度			合計
		低群	中群	高群	
高校 好意 度	低群	2 (1.3)	10 (6.5)	5 (3.2)	17 (11)
	中群	1 (0.6)	33 (21.4)	20 (13)	54 (35.1)
	高群	3 (1.9)	24 (15.6)	56 (36.4)	83 (53.9)
合計		6 (3.9)	67 (43.5)	81 (52.6)	154 (100.0)

表内の数値は人数を表わす、カッコ内の数値はパーセントを表わす

4.2. 本研究において抽出された学生の質的分析

高校と大学における生活満足度、授業理解度、授業快適度、学校好意度という4つの指標に基づいて抽出した、学校不適応の疑いのある学生28名を表6に示す。高校在学中の評定値高低をH高とH低で表わし、大学入学後の評定値高低をU高とU低で表わす。そして、それぞれ高校低群・大学低群をH低U低、高校高群・大学低群をH高U低、高校低群・大学高群をH低U高と記載する。さらに、今回は抽出された学生の中から複数の指標において、該当した9名(A~I)の学生に注目し(それ以外の19名はa~sで示す)原因の一端を探り、サポートのあり方について検討する。各学生のプロフィールを表7に示す。

表6. 質問紙調査結果に基づいた不適応の疑いのある学生

	高校低群・大学低群(H低U低)	高校高群・大学低群(H高U低)	高校低群・大学高群(H低U高)
生活満足度	3名(a, b, c)	3名(A, d, B)	7名(C, e, f, D, E, F, g)
授業理解度	1名(B)	1名(G)	0名
授業快適度	5名(C, h, i, j, H)	2名(B, k)	7名(G, F, l, m, n, o, I)
学校好意度	2名(H, p)	3名(A, B, a)	5名(D, E, l, r, s)

表7. 対象学生のプロフィール

	年齢	性別	居住形態
A	19	女性	1人暮らし
B	18	男性	自宅
C	20	男性	自宅
D	18	男性	1人暮らし
E	19	女性	自宅
F	22	男性	1人暮らし
G	19	女性	自宅
H	19	女性	自宅
I	19	女性	1人暮らし

(1) 女子学生 A [生活満足度：H 高 U 低] [学校好意度：H 高 U 低]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望ではなかったが、親の勧めで受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っている。生活満足度と学校好意度については、大学の方が低い値を示していたが、授業の理解度については、高校より高くなっている。友人については、高校・大学共に、「いなかった(いない)」と回答している。高校・大学共にアルバイトの経験はない。部活動・サークルなどには、高校・大学共に所属している。将来の目標については、高校ではなかったが、大学では目標があり、「まわりの人とどちらかと言えば将来について話す」との回答であった。しかし、自分の未来は明るくないと考えている。

課題レポートの特徴 大学の立地や設備については「大きくてきれいな大学」「街の中にあり、交通の便が良い」「雰囲気の良い大学」「(喫煙者用に) 喫煙所が校内に設置してあるのも良い」等としている。また、教職員に関しても「1人1人の人権をととても大切にしている」といった文章が記されていた。大学の授業に関しては、「自由なので遅刻しても構わなくて、けじめがないと思っていた。だが、3限目の人間心理学科の入門実習では『授業開始時間までに席について学生証をさげていないと出席カードがもらえない』という規定があり、メリハリがつく良いシステムだ」としている。そして最後に、総合して「マナーがなっていて良い大学」と記述している。

総合的な解釈・サポートのあり方 質問紙調査では、入学後に学校好意度が低下していたものの、レポートではキャンパス内での喫煙所や学生相談室などの例を取り上げ「神戸学院大学は人権を大切にあり、マナーがなっていて良い大学だと思われる」というように、大学に対しての好意度の向上を全面的に表明しているように見受けられた。これは、高校の時に抱いた大学のイメージを良い意味で覆している結果かもしれない。しかしながら、大学に対する好意度や満足度は、まだまだ改善の余地があると思われる。大学の施設や授業、教職員に対してのイメージの記述がある一方で、質問紙調査でも取り上げた友人関係についての記述が全くないことから、そのことが大部分の割合で生活満足度や学校好意度の低さにもつながっていることと推察される。今後、授業理解度、授業快適度や大学好意度の向上に結びつくことを期待したい。また、1人暮らしであることから、生活面へのサポートも今後必要ではないだろうか。本人より「今、援助が必要である」と発信できるような環境づくりをはじめ、入学後に本人が感じた大学へのイメージを壊さぬよう、見守り続けることが必要だと思われる。

(2)男子学生 B [生活満足度:H 高 U 低] [授業理解度:H 低 U 低] [授業快適度:H 高 U 低]
[学校好意度:H 高 U 低]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望ではなかったが、自らの判断で受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っている。授業理解度については、高校・大学共に低い値を示しているが、生活満足度や授業快適度、学校好意度においては、いずれも大学の値が著しく低い。友人については、高校・大学共に「いた(いる)」と回答している。高校ではしていなかったアルバイトも大学では始めた。高校・大学共に、部活動やサークル活動にも所属している。将来については、高校・大学共に、目標はなく、「将来についてまわりの人と話すか」、「自分の未来が明るいか」という問いには「どちらでもない」と回答していた。

課題レポートの特徴 友人についての記述が多く、入学前は「友だちとかできるのかな」、「できなかったらどうしよう」という不安を綴っている。入学後の内容では「いざ入学してみると、みんな心が広く、優しい人ばかりだった。誰に喋りかけても普通に喋ってくれた。毎日3限目に入門実習があることに加えて、語学のクラスが少人数であることのおかげで、友だちを増やすことができた」と記述している。また、「こういう自分とは違う地域から来ている人と触れ合うことで、自分の視野が広がった」と、自分の友人がどこの出身であるかなど詳細を述べていた。

総合的な解釈・サポートのあり方 入学前の不安要素となっていた友人関係については、すぐに解消したようであった。このことは、質問項目の「仲の良い友人がいるか」という問いに「いる」と答えていたことと一貫している。しかしながら、課題レポートの内容において学習面での記述が、授業名でしか表されておらず、学習への興味のなさを示している。また、授業快適度が大学では著しく低いことから、課題や試験などでつまずき、学習面への「難しさ」を示しているのかもしれない。しかし、部活動・サークル活動に加え、大学入学後にアルバイトを始めたことから、対人関係においては、肯定的に受け止めているのではないだろうか。また大学においても友人には恵まれ、その友人との関係において「自分の視野が広がった」や「これからが楽しみだ」と綴っているため、本人の楽しみが一つずつ増え、その延長線上において「学習」への興味や理解に繋がることを期待したい。

(3) 男子学生 C [生活満足度:H 低 U 高] [授業快適度:H 低 U 低]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望ではなかったが、塾の講師の勧めで受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っている。高校・大学における生活満足度については、高校において低かったが、大学では高い値を示した。しかしながら、授業快適度は、高校・大学共に低かった。友人については、高校では「いた」と回答していたが、大学では「いない」と回答している。アルバイト経験、部活動・サークル所属に関しては高校・大学共に経験がない。将来に対して、高校・大学共に目標があり、「何か将来のためにしている」という回答であった。

課題レポートの特徴 課題レポートは主に、学習面について記述されていた。対人関係の悩みの解決策として心理学を学びたいと思い、受験した経緯が記されていた。以前は心理学に関して、書物からの知識が中心であり、「心理学=自分のことも、他人のことも手に取るようにわかる」という認識だったが、現在は「だんだん本でかじった知識以上の事柄

が出てきて、今自分が持っているイメージが覆される日が来るのが楽しみです」「今は自分の心の整理の仕方と他人の心の受け取り方の一端が少しでもわかればいいと思うようになりました。それらの事を学ぶのが、楽しみです」など学習に対する意欲的な表現が示されるなどの変化が見られた。

総合的な解釈・サポートのあり方 現在、本学科を気に入っていることや、大学での満足度が高くなっていることから、大学に対して良い雰囲気を持っていると考えられる。そして学習面においても、レポートでは意欲的に述べられており、これからの学習状況によって授業快適度がさらに高まる可能性が考えられる。将来に対しての目標があり、そのために何かを努力していることから、その気持ちを持ち続け、大学生活がより充実したものになることが望まれる。友人関係については、大学では「いない」と回答し、アルバイトや部活動・サークル活動の経験もない。またレポートにあった「対人関係での悩み」からも読み取れるように、人とのかかわりが苦手な可能性がある。学習面での自信がつけば、人とのかかわりが苦手な部分も少しずつ克服していけるかもしれない。また、本人の「自分の心の整理の仕方と他人の心の受け取り方の一端が少しでもわかればいい」という表現から、彼自身の内的な問題や悩みを共有できる友人に出会えたとき、大きく成長するのではないだろうか。

(4) 男子学生 D [生活満足度：H 低 U 高] [学校好意度：H 低 U 高]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望ではなかったが、塾の講師の勧めで受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っている。生活満足度と学校好意度において、どちらも高校では低かったが、大学では高かった。友人については、高校・大学共に「いた(いる)」と回答していた。高校・大学共にアルバイトの経験はない。部活動・サークル活動について、高校のときは所属していなかったが、大学では所属している。高校・大学共に、将来の目標はないものの、自分の将来については「明るい」と考えている。

課題レポートの特徴 課題レポートは主に、学習面について記述されていた。内容としては、大学生のイメージを表わしており「自由」を「好きな授業の受講」とし、その背後にある「責任」として「出席をして単位を取ること」や「授業の休講・教室変更の情報の確認」と表現されていた。しかしながら、大学に対しての入学前のイメージが「ただ先生が話をして黒板に書かれたことをひたすら板書していただくだけの講義」であったが、実際には、講義が教員からの一方通行ではないということや教員と学生とのコミュニケーションが活発に行われていること、授業において学部を超えた繋がりを作ることができること、など入学後に感じた大学での授業に関する肯定的な面が多く記述されていた。

総合的な解釈・サポートのあり方 質問紙調査においては生活満足度と学校好意度が大学で高くなっており、課題レポートにおいても肯定的なイメージが記述されていた。そして入学後すぐに、自由であるがゆえに自己責任で行動しなければならないことも学んでいる。高校までは、自分で授業に関しての情報を集めることは不必要であったかもしれない。今後は、行動の幅を広げたり、学習面に関しても同様に苦手な分野であってもそれを克服することで、さらに大きな成長がみられると期待している。

(5) 女子学生 E [生活満足度：H 低 U 高] [学校好意度：H 低 U 高]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望ではなかったが、塾の講師の勧めで受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っている。生活満足度と学校好意度においては、高校は低かったが、大学では高い値を示していた。友人については、高校・大学共に「いた(いる)」と回答していた。高校・大学共にアルバイトの経験がない。部活動・サークル活動については高校では所属していたものの、大学では所属していない。高校では将来の目標があったが、大学では目標がなくなっており、「将来のために何かをしていることはない」との回答であった。

課題レポートの特徴 課題レポートでは高校の時に抱いていたイメージとの相違点が記述されており、学習面を含む大学生生活全般において「思っていたほどラクでも自由でもないということ」、「時間厳守の授業や必修の授業が多いこと」が取り上げられていた。しかし「うれしい誤算」として「順調に友だちができていく」との記述がみられた。また、友人について「とても良い友だちに恵まれ、楽しい大学生生活を過ごしている。これからも多くの人と触れ合い、視野を広げ、充実した大学生生活を過ごしていきたい」と記されていた。そして文末では「ただ面倒くさそう、という理由で投げ出したりせず真正面から受け止めて頑張っていきたい」という様々な事柄に対して大学生としての意気込みが見受けられた。

総合的な解釈・サポートのあり方 生活満足度と学校好意度が高校から大学にかけて高くなっていった。そして友人に恵まれているという記述からも学生生活に満足している様子がうかがえる。そして、これまで面倒だと回避してきた学習や活動を、そうではいけないと考え、それらに取り組もうとしているようであることから、その気持ちを持ち続け、今後は将来の目標を見つけたり、課外活動を行うなどして、より一層その幅を広げてほしい。

(6) 男子学生 F [生活満足度：H 低 U 高] [授業快適度：H 低 U 高]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望ではなかったが、塾の講師の勧めで受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っている。生活満足度と授業快適度においては、高校は低かったが、大学では、高い値を示していた。友人については、高校・大学共に、「いた(いる)」と回答している。アルバイトは高校・大学共に経験がない。部活動・サークル活動については高校では所属していなかったが、大学では所属している。将来の目標について、高校ではなかったが、大学では「ある」と回答している。また将来のために何かをしていて、「まわりの人とは将来のことを話す」が、「自分の未来は明るくない」と考えている。

課題レポートの特徴 本学入学前に他大学に籍を置いていた経験があり、課題レポートの中で高校在学時と現在とで大学のイメージの差は少ないと述べられていた。そして、「自分の将来を価値あるものにするため抱いていたイメージの違いと甘さを真摯に受け止めたい」、「精進していきたい」や「友だちと共に高め合いながら充実した大学生を送りたい」など、今後のことを中心に記述されていた。

総合的な解釈・サポートのあり方 他大学に籍を置いていた経験があるが、本大学での学習面・生活面において大変満足している様子がうかがえる。友人関係も良好のようで、大学では部活動・サークル活動に所属していることから課外活動を通して、大学生生活がさらに充実していくことが期待される。しかしながら本人は大学に入学し将来の目標が見つかったものの、「未来が明るくない」と回答していることから、本人にしかわからない間

題があるのかもしれない。

(7) 女子学生 G [授業理解度：H 高 U 低] [授業快適度：H 低 U 高]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望であり、自らの判断で受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っている。授業理解度と授業快適度においては、高校は低かったが、大学では高い値を示していた。友人については、高校・大学共に、「いた(いる)」と回答している。高校ではしていなかったアルバイトも大学では始めた。部活動・サークル活動については高校では所属していたが、大学では所属していない。将来について、高校・大学共に目標があり、目標にしている人がある。将来のことについて、「まわりの人とどちらかといえば話す」と回答し、将来のためにしていることがあるが、「自分の未来は明るくない」と回答している。

課題レポートの特徴 課題レポートの中では、「教科書のない授業スタイルが自分に合った」と書かれていた。現在の学習スタイルが、暗記中心であった高校生までの学習スタイルと異なることが記述されていた。「実践して社会スキルを覚える新鮮さに興味は一層沸いた」と述べられている。一方、学習面での肯定的な記述とは異なり、「勉強とアルバイトに追われる毎日であり、趣味や息抜きさえもできずに疲れが溜まっている」とも記されている。しかし、「自由に放たれた中でどれだけ自分を戒められるか」、「自分自身で学ぶものを選択し、自分の意志で得ていく」といった力強さも表現されていた。

総合的な解釈・サポートのあり方 高校と比べ大学での授業快適度が高まった理由としては、本学科が第一志望であり、自分の意思で受験したことや大学の授業が本人の学習スタイルに合っていたこと等から推察される。さらに課題レポートにおいても授業内容や感想について記述しており、大学に対して学習面で本人がかなり期待をしていることがうかがえる。しかしながら、「大学入学後に始めたアルバイトのため、忙しく、疲れがたまっている」と述べており、生活面については、かなり否定的にとらえている。今後は時間の使い方を自分なりに優先順位をつけて明確にし、「自分を戒め」、「自分自身で学ぶものを選択し、自分の意志で得ていきたい」という本人を見守っていきたい。

(8) 女子学生 H [授業快適度：H 低 U 低] [学校好意度：H 低 U 低]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望であり、親の勧めで受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っていない。授業快適度と学校好意度においては、高校・大学共に低い値を示していた。友人については、高校・大学共に、「いた(いる)」と回答している。高校ではアルバイトをしていたが大学ではしていない。部活動・サークル活動については高校・大学共所属していない。将来の目標について、高校・大学共に「なかった(ない)」と回答していた。また、将来のために何かをしているわけではないが、将来のことについて「まわりの人とどちらかといえば話している」と回答している。

課題レポートの特徴 「入学直後は、わからないことが多くて話を聞くたびにわからないことが増えていったが友達と一つずつ消化して解決した」と記述している。また、大学生活全般に対して「自由に出来ることが実は大変」と表現されていたが、大学での講義を受けて、「大学では『社会に出るために養っていくべき力と知識』をつけなければいけないことがわかった」と記されていた。

総合的な解釈・サポートのあり方 本学科を受験の際には、第一志望であったが、現在は本学科を気に入っていない点から、入学後に本人にとって何か否定的な出来事があったのかもしれない。質問紙調査では友人が高校・大学共に「いた(いる)」と回答しており、また課題レポートでも友人との話題が出てきていたことから、今後は友人関係を通して本学科への好意度が高まり、本学科での学習環境が本人にとってより有益なものになるだろう。レポートを読む限りでは大学という場で、何をすべきかということについて、本人なりによく理解をしているようである。在学中に、自分がしてみたいことや自分にふさわしい何かを見つけるきっかけとして、まわりの人との会話を豊かにしていくことも方法の1つとして考えられる。

(9) 女子学生 I [授業快適度：H 低 U 高] [学校好意度：H 低 U 高]

質問紙調査結果の特徴 本学科は第一志望ではなかったが、親の勧めで受験を決め入学した。現在は本学科を気に入っている。授業快適度と学校好意度においては、高校は低かったが、大学では、高い値を示していた。友人については、高校・大学共に、「いた(いる)」と回答している。アルバイトは高校・大学共に経験がなく、部活動・サークル活動についても高校・大学共に所属していない。将来の目標について、高校・大学共に目標があり、目標とする人がいる。将来について、「まわりの人とは話さない」が、「自分の未来は明るい」と考えている。

課題レポートの特徴 大学入学前の大学に対してのイメージは「自由な分、責任を持たなくてはいけない」、「自分でなんとかしなくてはいけない」、「体の病気も心の病気も自己責任」、「自立しなくてはいけない」という表現で記されていた。しかし入学後には、「本当につらくなったら支えてくれる人たちがいる」、「しっかり守られている」という表現に変化していた。学習面の記述は一切なく、レポートの大部分が生活面全般についての記述で占められていた。そして最後に「想像していた大学よりも結構厳しくて、ほんの少しだけあたたかかった」とまとめている。

総合的な解釈・サポートのあり方 課題レポートより、1人暮らしをはじめとする生活全般についての入学前の不安要素が随所に見られた。しかしながら、現在は入学前の周囲の厳しい発言（自助努力や自主性・責任感などが求められること）や自分自身の中での否定的なイメージは覆されたのではないかと考えられる。将来の目標をしっかりと持っており、「自分の未来は明るい」と確信している。今後、様々な人とかかわり、本人の思う「厳しくもやさしい大学」での生活を充実させ、つらいときには「守られている」という感覚を持ちながら、誰かに頼り、助けを求めてもらいたい。

5. 総合考察

本研究では、大学新生に焦点をあて、高校在学中と大学入学後の現在における学習面・生活面・対人関係面などの質問をもとに、学校不適応が疑われる学生を抽出した。そして、学生本人が記述した大学に関する課題レポートの質的分析を通して、学校不適応の原因の一端を探り、これからのサポートのあり方について検討をおこなった。

9名の対象学生における性別の内訳は、男性4名・女性5名であり、平均年齢は19.22歳と高めであった。学生A, B, Hの3名については、4つの指標（生活満足度、授業理

解度、授業快適度、学校好意度)のうちいずれか2つ以上の指標において大学入学後の評定値が低かった。中でも学生Bは4つすべての指標が大学入学後において低い評定値を示した。これらの3名は、山田(2006)や鳴澤(1998)などの先行研究において扱われてきた「現在不適応である」または「以前に比べて不適応状態が深刻化している」という学生であると考えられる。また、学生D, E, F, Iの4名については、4つの指標のうちいずれか2つ以上の指標において高校在学中の評定値が低く大学入学後での評定値は高い値を示していた。これらの4名は、何らかの問題を抱えている可能性のある、大学入学直後にうまく適応できていると自覚している学生であると考えられる。

質問紙調査の結果をみると、9名のうち、多くの学生が自分の判断ではなく誰かの勧めで本学科を受験したと回答していた。また、その多くが第一志望ではなかったものの、入学した現在は本学科を気に入っていた。友人については、多くの学生が「いる」と回答したものの、2名においては大学での友人が「いない」と回答していた。大学での学生相談の中で多くの割合が友人関係に関する問題であり(吉岡, 2010)、入学直後に対人関係の輪を築けない者は学内で自分の居場所が見つけられない(康, 2000)ことを考えると、大学生活における適応に関して、仲の良い友人の存在は非常に重要である。よって、友人が「いない」と回答していた2名(A, C)に関しては、大学内での対人関係について今後も経過観察していく必要があるだろう。また、高校・大学共にアルバイト経験の割合が少なく、部活動・サークル所属に関しては、少しずつ増えてきているものの、所属していない学生も3名(C, G, H)いた。アルバイトや部活動を通して学ぶことができるものは大変多い。学生時代に積極的に様々な場面へ赴き、色々な人とのかかわりを通して本人にとって有益な対人関係が築けることが望ましいと考えられる。そして現在、課外活動において、何か経験がある人はその経験の中で本人なりに築いた人間関係を大切にしてもらいたい。これらに対するサポートとして、環境づくりや教職員からの呼びかけが必要になるであろう。

課題レポートの内容をみると、9名のうち、多くの学生が学習面を含む大学生活全般に関して、入学前に考えていた「自由」というイメージの変化を記述していた。大学での授業に関して、好きな時に授業をとることができるといった「自由」や、遅刻などをしても許されるといった「自由」が本学科の実習科目においては通用しないことや、「自由」であることが決して楽なことではなく、すべて自分の責任で行わなくてはならないということを大学生活を送る中で自覚しはじめていた。それと同時に入学前と入学後とのイメージのずれに前向きに取り組む姿勢を持ちながらも、多少戸惑いを感じているようであった。学習面での適応は学校適応にとって重要であり(広沢, 2007)、履修登録の失敗や授業に対する不満は本人の不本意感を生じさせる可能性がある(小林, 2000)。

学生が入学直後に直面する生活面での変化に関して、学生自身が前向きに取り組む姿勢を保ちながら、大学への適応が可能になるようなサポートを教職員が行う必要があると考えられる。ここでの適切なサポートによって、学生D, E, F, Iのような大学入学直後にうまく適応できていると自覚している学生が、その後、実際の生活においては不適応に陥ってしまうことを防げるかもしれない。教職員の立場としては、学生が高校時代の辛く苦しい経験を脱した直後に、楽しく充実した大学生活が始まったのにも関わらず、再度辛く苦

しい経験をしてほしくはない。今回の分析を通して抽出した学生に対して、継続的にコミュニケーションをとっていくことで、大学生活に対する肯定的な印象が持続するように有効なサポートをおこなっていくことが望ましい。

課題レポートに関しては、今回抽出した学生に限らず、全体的に否定的な意見や感想が記述されることが少なく、否定的な表現をしていますが、それをカバーするような記述が多く見られた。しかし、否定的な記述が少ないからといって、大学に対するイメージが肯定的なものばかりであると結論づけるには注意が必要であろう。このような結果が得られたことについて、次のような可能性が考えられる。まず、本研究で使用した課題レポートは授業の最後に翌週までのレポート課題として課されたものである。そのことから、学生がこの課題を授業の一部であり、レポートの内容が成績に反映されることを重く見て、現実を感じていることよりも、より肯定的な記述がなされていた可能性がある。実際に、質問紙調査のデータでは、大学の満足度や、授業における理解度や快適度、学校好意度が低い学生であっても、課題レポートでは丁寧で肯定的な表現が用いられているものが多かった。この点は、今後、データ収集の方法を工夫することによって改善していく必要がある。

本学科の学生が学業に熱心に取り組み、満足した大学生活を送ってくれることは我々の教育目標の一つである。本研究の結果では、全体の8割程度(154名中126名)がそのような望ましい大学生活を送っている学生であることが示された。このことは、教職員にとって喜ばしいことである。しかし我々は今後の学生の精神的な変化もきちんと捉えられるよう普段からしっかりと学生の現状を把握し、いつでも支援できる体制を設備することが重要であると再確認した。学生が大学に入学してから適応していく過程の中で直面する困難さは、個人個人さまざまであり、今後も、学生の生の声を大切に、情報収集をしていきたい。そのためにも、本学科に所属している4年間にわたっての経過を縦断的にみていく必要があるだろう。

引用文献

- 藤井義久(1998). 大学生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 441-448.
- 広沢俊宗(2007). 大学新生の適応に関する研究(Ⅰ) - 学習面での適応 - 不適応に関わる諸変数の検討 - 関西国際大学研究紀要, 8, 121-138.
- 康 智善(2000). 「居場所」と「まなざし」の対人関係 小林哲郎・高石恭子・杉原保史(編) 大学生がカウンセリングを求めるとき ミネルヴァ書房
- 小林哲郎・高石恭子・杉原保史(2000). 大学生がカウンセリングを求めるとき ミネルヴァ書房
- 宮下一博・杉村和美(2008). 大学生の自己分析-いまだ見えぬアイデンティティに突然気づくために- ナカニシヤ出版
- 鳴澤 實(1998). こころの発達援助-学生相談の事例から- ほんの森出版
- 山田ゆかり(2006). 大学新生における適応感の検討 名古屋文理大学紀要, 6, 29-36.
- 吉岡和子・高橋紀子(2010). 大学生の友人関係論-友だちづくりのヒント- ナカニシヤ出版